

鏡花文学の魅力



金沢学院大学

学長 秋山 稔

■ はじめに

今日は、「鏡花文学の魅力」を紹介したいと思えます。鏡花文学は難しいところもありますが、最近では口語訳もあり、作品にイラストを入れているものや映像も相当あります。特に泉鏡花記念館へと何度も足を運んでいただければと思います。

■ 鏡花の評価

鏡花文学の魅力はどのように語られてきたかというところから始めたいと思います。夏目漱石や森鷗外は鏡花を高く評価した人です。二人とも自然主義には与しなかつた。鏡花の作風は浪漫主義です。漱石にもロマンチックな作品があります。また、鷗外はご存じのように、ヨーロッパの浪漫主義を日本に紹介した人です。この二人が鏡花を評価するのは当たり前だと思っています。

夏目漱石には『夢十夜』、『幻影の盾』など、鏡

花につながる作品がたくさんあります。『草枕』もそうだと思います。雪の福井県が舞台の鏡花作『銀短冊』を読んだ漱石は、「確かに天才だ。一句々々の妙はいふべからざるものがある」(『近作短評』明治38年)と書いています。漱石は東京大学において日本人で初めて英文学を教えた人ですから、大変な学者です。古今東西の文学に詳しい漱石から見ても、鏡花は確かに「天才」だと、鏡花の表現力を評価しているのだらうと思います。

高山樗牛の弟斎藤信策は『泉鏡花とロマンチック』(明治40年)という長い評論で、鏡花について二つのことを指摘しています。

一つは「鏡花は初めての夜の小説家である。……日本の文学は鏡花に至って初めての夜になったのである。」ということ。たしかに鏡花の作品を読んだらみると、夕方から夜にかけての物語が非常に多い。水木しげるさんが『水木しげるの泉鏡花伝』(平成27年)で取り上げている「北國新聞」連載の『黒猫』(明治28年)という作品も、ほとんど夜が舞台です。夜には、幽霊、怪奇、神秘、幽霊等が現れる。